

千駄ヶ谷の青い空

「亡き父にささぐジャンプ」翌日2005年6月6日付け朝刊の見出しである。

その朝、合宿所を出た池田久美子は心細さでいっぱいだった。三ヶ月前に父親が他界して初めての大会だったからだ。コーチでもあった父親の死の実感も湧かぬ今の自分に、果たして日本選手権と言う大舞台で戦う勇気が出るのだろうか。国立競技場までのバスの中でも心細さが消えることはなかった。更衣室で着替えていると、周りの選手達の緊張感が伝わってきて、それが余計に久美子の心を沈ませた。

「だめだ、だめだ、元気出さなきゃ。」

久美子が出場する走り幅跳びには全国の精鋭が集まっていた、もちろん、その中には花岡麻帆選手もいた。花岡は171cmの長身を生かしたスケールの大きい跳躍が特長で、久美子より5つ年上だった。6m82の走り幅跳びの日本記録ばかりでなく、14m04の三段跳びの日本記録保持者でもあった。

久美子は小・中学生のとき「山形の天才陸上少女」と呼ばれたほどの選手だったが、花岡にはなかなか勝てなかった。2001年の日本選手権で久美子が従来の日本記録6m61を大きく超える6m78の跳躍を見せたが、花岡はそれを上回る6m82を跳んで日本記録保持者となった。2003年の日本選手権では、僅か1cm差の6m64で久美子が辛くも勝ったが、翌年2004年の日本選手権では3cmの差で負けた。(注1)

2005年の日本選手権は同年ヘルシンキで開催される世界陸上選手権の選考会を兼ねていた。昨年までの花岡と久美子の日本選手権での勝敗は、久美子の1勝4敗だった。今日はどうしても花岡選手に勝ちたい。最大のライバルである花岡選手に勝ってその結果を父親の墓前に報告したい。しかし、今のような弱気な気持ちでは勝てるはずがない。着替えを済ませ、気持ちを競技に集中させイメージトレーニングしながら待機していると選手の点呼が始まり、最初に呼ばれた前年覇者の花岡は、チラッと久美子に目をやり会釈したが、その表情には余裕すら感じられた。

先導員に従って競技場に入るとトラック競技の熱戦に声援を送る観客の声が耳に痛かった。短距離、長距離のトラック競技は陸上競技の花形で、観客の声援も多い。それは比較的短時間で勝敗の決着がつくこと、抜きつ抜かれつのレース

の駆け引きが面白いことが理由である。一方、決着がつくまでに長い時間が掛かるフィールド競技は地味で観客の声援も少ない。特に走り幅跳びは競技場の正面スタンド前に一本の助走路と着地用の砂場があるだけなので、走り幅跳びが好きで興味を持って見ている観客以外は、競技をしているのか、いないのかさえ関心がない。そのため選手の中には助走の前に観客席に向かって両手を挙げて手を叩き、観客に拍手を求める者も現れた。そうでもしなければ、観客の関心を引き付けることができないからだ。

走り幅跳びは6回の試技があるが、各選手がまず3回の試技を行い、上位8名だけが続く3回の試技を行うことができる。とにかく上位8名に残らなくては話にならない。久美子は何とか気持ちを落ち着かせながら上位8名に残った。もちろん花岡も残っている。ここまでの記録は、花岡が6 m 5 7の2位、久美子は3 c m上回る6 m 6 0の記録でトップとなり、無我夢中で跳んだ結果、予想を上回る途中経過だった。3回目までの記録に従って久美子は最終跳躍者となり花岡は久美子の直前に試技することになった。

4回目の試技で花岡は6 m 6 1を跳び久美子を1 c m超え、この時点でトップが入れ替わった。久美子も5回目の試技で6 m 6 9を跳び再びトップに立った。これで勝てる。花岡に8 c mの差をつけた久美子は勝利を確信した。これまで花岡にこれほどの大差をつけたことがなかったからである。一方、花岡は追い込まれた。

運命の最終跳躍6回目。先に花岡が跳んだ。花岡は自身が日本記録を持っている三段跳びを欠場してまで、この走り幅跳びに賭けていた。久美子は祈るような気持ちで見ている。花岡はぐんぐんスピードに乗り踏み切りもピタリと合い、宙を舞うように高く跳んだ。少し向かい風(注 2)だったが素晴らしい跳躍だった。計測員が計測を始める。掲示板に映しだされた記録は、6 m 6 9。なんと土壇場で花岡が久美子に追いついたのである。

ルールでは、二人が同じ記録で並んだ場合、二番目に良い記録(セカンド記録)で勝敗が決まるため、現時点で6 m 6 1のセカンド記録(4回目の跳躍)を持つ花岡がトップに立ち優位に立った。久美子のセカンド記録は6 m 6 0で1 c m負けている。

日本選手権も残すは久美子の6回目の跳躍だけになった。久美子が6 m 6 1以上を跳ばなければ花岡の優勝となる。絶体絶命のピンチに追い込まれた。

今朝合宿所を出るときに感じた心細さがまた襲ってきた。

「今日ここまで、花岡さんを相手に良く戦ってきたよ。相手は日本記録保持者。負けてもともとじゃないの。最後は自分らしいジャンプにしよう。」

自分にそう言い聞かせて久美子はスタート地点に向かった。助走路のマークに立って久美子は澄み切った空を仰いだ。

「父さん、跳ぶから力を貸して。」

向かい風が僅かに追い風(注 3)になったのを感じ、ピョンと小さく跳ねて久美子は走り出した。風ではない何かに背中を押されている。最も怖れていたのはファールだったが、右足のつま先に踏み切り板の感触があった。

「よしっ。」

大きく前に跳び出すと 209 番のゼッケンが大きく膨らみ身体が軽く感じられた。長い空中時間から脚先を思い切り前に出すと砂が霧のように飛び散った。

スズキ自動車陸上部の合宿所にいつもの静寂が戻った。取材陣も帰ったようだ。久美子は自室でぼんやり窓の外の景色を眺めていた。この空の向こうには父が眠る故郷の山形がある。

「不安や心細さでいっぱいだったのに、勝てたのが信じられない。」

久美子の 6 回目の試技の記録は、6 m 6 1 だった。その結果、久美子と花岡はファースト記録が 6 m 6 9 で並び、セカンド記録も 6 m 6 1 で並んだのである。このような場合、三番目に良い記録（サード記録）で勝敗が決まる。サード記録は花岡が 6 m 5 7、久美子は 6 m 6 0 とその差は僅かに 3 c m で久美子が優勝したのだった。日本選手権でファースト記録、セカンド記録が並び、サード記録、それも 3 c m で勝敗が決まるという前代未聞の好勝負の勝者となった久美子は表彰台で青く澄み渡った空を見つめて呟いた。

「父さんが勝たせてくれたのね。…ありがとう父さん。」

(注 1) ライバル同士、池田久美子と花岡麻帆の日本選手権での走り幅跳びの勝負は伯仲していた。二人が優勝と準優勝、即ち一位と二位のどちらかになった大会は 2000 年の第 84 回大会から、2006 年の第 90 回大会まで連続 7 年間に亘った。何と 7 年間もの間、この二人以外に一位、二位にはなっていないのである。勝敗は花岡麻帆の 4 勝 3 敗だったが、7 試合のうち 4 試合は、4 c m 以内という僅差の勝負でもあった。

2005年の日本選手権（第89回）で池田久美子は走り幅跳びのほか、100mハードルでも優勝（13秒47）している。また記録によれば（注2）花岡麻帆の6回目の跳躍のときの風速は向かい風（0.1m）だったが、（注3）池田久美子の6回目の跳躍のときの風速は追い風（1.1m）だったという。

その後、池田久美子は2006年に6m86の日本記録を樹立し、その記録は今も破られていない。また久美子は100mハードルも得意とし、2007年には13秒02の日本歴代二位の記録も出している。また現在、高校の教師をしている花岡麻帆が1999年に出した三段跳びの日本記録14m04は現在も破られていない。

201902Athlete-1